



りべるたん通信について

あなたがどういう経緯でこの冊子を読む羽目になってしまったのか、私には分かりませんが、この冊子はりべるたんの公式「機関紙」の類を目指して作成されたものではありません。

インターネットの検索ツールで「りべるたん」と検索すると家宅捜索や厳つい文字でペイントされた様々な色のヘルメット、□□□□派のアジト etc...と、おおよそ「シェアハウス」という言葉からは連想され得ない情報がわんさか出てきます。そういった事情もあり、実は我々りべるたんが何を目指し、何に基づいた集団なのかはあまりよく知られていないようです。また、多くのデマや誤解もあります。

そこで、未だりべるたんをよく知らない多くの人々に、私たちの問題意識や行動をちゃんと知ってもらおうと思い、本紙の発行に至りました。

端的に言えば、私たちは《共同体》作りを目指しているので、本誌では主に労働、衣食住、目的や本質など、共同体における様々な問題を毎号テーマを設定して取り上げていきます。

また、それに対応してりべるたんの取り組みをお伝えしていこうと思います。ただし、この冊子を読んだからと言ってりべるたんを知った気にはならないで欲しいと思います。言葉や行動を共にして初めて、私たちの活動の意義や限界を知ることが出来るのではないのでしょうか。

りべるたんは今年、創設から4年目を迎え、大きな変化の時期を迎えています。設立当初は大学内におけり学生会館や、それに類するものの代用として機能していたりべるたんも、現在はより私たちの生活全般を包括する機能を備えた場所を目指して運営がなされています(詳しくはりべるたん略歴をご参照ください)。

この変化を出来るだけ多くの人々が当事者として目撃し、共に経験することが出来れば幸いです。 運営者 井田 敬

まずは「りべるたん通信」を手にとって頂きありがとうございます。  
りべるたん通信とは東池袋にある共同実験運営スペースの「りべるたん」のことを皆さまに紹介するための冊子です。

りべるたんとは何か？ 中々難しい問いだと思います。ネットで検索すると「怪しい」検索結果ばかりが表示されます。  
例えば〇〇派のアジトと言う噂、公安警察にガサに入られた動画、壁に貼られたたくさんのビラ、カラフルなヘルメットの群れ...などです。

実際、それらはりべるたんを表す情報の一端ではあると思います。しかし「それだけ」がりべるたんの全てではありません。  
それについては実際に足を運んで頂かないとなかなか伝わらないと思います。

とはいえ...。初めてりべるたんを訪問することは誰にとってもなかなかハードルが高い様子です。  
かく言うこの私も初めて訪問した 2 年前の夏は、知人の紹介もあって「胡散臭いなあ...」と思いつつりべるたんの扉をたたいたのです（笑）  
そこで、りべるたんの運営員の私たちは「来ていただく前のワンクッション」を作るため「りべるたん通信」の発行を行うことにしました。

これから第二号、第三号と続けて発行される予定のりべるたん通信のなかでは、様々な側面から、このりべるたんのことを紹介し、表していくことでしょう。

この文章の著者たる私とりべるたんの関わりを少し書きます。  
りべるたんとは元々、潰れてしまった法政大学の学生会館の代替として学生を

中心とした集まりが「学外の拠点」を作るために創設者有志が各々お金を出し合って、一件の物件を借りたそうです。

その物件が「りべるたん」となっています。

創設された正確な日付は **2012年7月15日** とのことです。当初は神楽坂にあったそうですが、約一年後に今の東池袋の物件に移ってきた様子です。

そのあたりの事情は実はよく知りません。 というのも...。私がりべるたんを初めて訪れたのはその **2年後の2014年**の夏だからです。

**2年前の夏**...その頃の私は、ひきこもり気味だったものの何とか地元神奈川の大学を卒業する手前でした。

そして、ひきこもり系の人が多く集まる横浜のフリースペースによく出入りしてもいました。

そうした中、右翼活動家だけども、ひきこもり系の人に関わる活動をしている山口裕二郎さんのことを知ったのです。

右翼で教育関係のことをしている人って、戸塚ヨットスクールのような「スパルタ」な人なのかなあと当初こそは思いましたが、実際にお会いすると山口さんは、個人を尊重して寄り添う、一人の大人として向き合う方なのだなと感じました。

その山口さんが運営に参加なさっている「場」があると聞き、そこが「りべるたん」であった次第です。

私の当初の認識としては、りべるたんは一つの「居場所、たむろする場」でした。

少し前までいたりべるたんとある関係者は、よく昼間から酒を飲みつつゲームをしている不思議な人でした。私も一緒に **TV** ゲームをしたものです。

そして時にはとなりの空き地で一緒に畑を耕してみたり、朝までお酒を飲んだり...と。色々なことをしました。

そこで出会った人たちのことは、一つの場所と時間を共有した仲間としてとても大事に思っています。

そして今、りべるたんでは有志で店舗付き物件を借りようとか、屋台をやろうとか...そんな面白い話が持ち上がっています。

私の認識としても、現実の動きとしてりべるたんは「居場所」「たまり場」から衣食住、そしてお金と職を共有する「共同体」としての側面が段々強まってきています。

少しずつ変化を遂げていくこの「りべるたん」。是非とも多くの方々がこの動きに関わってほしいです

この冊子を手にとった方で、まだ訪問なさっていない方は是非、りべるたんを訪れて頂きたいです。

私を始め、多くの運営者は貴方の訪問を心からお待ちしています。

運営者の一人 和田拓磨。

## 「りべるたん」、映画づくりへの道！（第1回）

こんにちは！ 早川由美子です。「りべるたん」でお会いしたことがある人はご存知かもしれませんが、私は今、“日本一過激なシェアハウス”、“自称サヨク気取りのお子様過激派集団”等、各方面から絶賛(?)されている「りべるたん」の、ドキュメンタリー映画を制作中なのです！

今後、この「りべるたん通信」で、映画制作の状況をお伝えできればと思います。

第1回目の今回は、自己紹介的なことを書きます。私は、2007年から映画制作を始めましたが、その前は公務員→会社員をしていました。それまで“映画監督”になりたいと思ったことはなく、映画が個人で作れるものだとも思っていませんでした。

映画制作には関心がありませんでしたが、一方で、表現活動には興味がありました。文章を書いたり、写真を撮ったりするのが好きで、会社員をしながら記事を書き、知り合いのミニコミ誌に掲載してもらっていました。

そんな頃、通勤途中で見る公園や駅の「ベンチ」がとても気になっていました。2～3人で座れるベンチに、なぜか仕切り（突起）がついている。雨がよけられるスペースに、意味不明なオブジェが突然作られる。ベンチが撤去され、自販機に置き換えられる……。例を挙げればキリがありません。

なぜこのようなものが作られるのか？と考えた時、それはベンチで寝る野宿者を排除するためのものではないかと思い、気持ち悪いやり方だと背筋が寒くな

りました。ベンチを占領する野宿者を、ベンチに仕切りをつけて排除したところで、貧困問題は何も解決しない。単に問題を“見えなく”させるだけなのに。

一方的に排除し、生存の場所を奪って行くやり方に腹を立て、私はそれを取材しよう決めました。土日の休みを使い、都内の大きな公園を回って、東京で一番寝にくいベンチを探そうと、百人以上の野宿者に声を掛けて話を聞き、記事を書きました。

私としては面白い(?)記事がかけたと思い、原稿を新聞社や週刊誌に持って行きました。原稿料はもらえなくても、きっとどこかで掲載してくれるのでは?という淡い期待を抱いて。

ところが、新聞社も雑誌社も、契約している記者やライターなどからしか記事を買うことはなく、私の記事を掲載してくれる会社はどこにもありませんでした。記事の信憑性などもあるので仕方のないことではありますが、当時、いち会社員の私には、そんなことは分かず落胆しました。

ホームレスの人が販売する雑誌「ビッグイシュー」の編集部にも持ち込みましたが、「読者層を広げたいので、ホームレス問題自体は、あまりストレートに取り上げたくない」と断られてしまい、いよいよお蔵入りになってしまうのかと悲しくなりました。

そんな頃、仕事中に聞いていたラジオで、偶然、インターネット新聞「オーマイニュース日本版」発刊の知らせを聞き、「誰でも市民記者として登録すれば、記事を発表できる」と知りました。オーマイニュースは韓国発のネットメディアで、市民による情報発信力の育成に力を入れているとのこと。

私は、どこからも掲載を拒否された「ホームレス撃退ベンチ」の記事を、ここ

なら発表できるかもしれないと考え、市民記者として登録し、記事を掲載してもらいました。記事はトップに配置され、読者がコメントも書けるようになっていました。

きっと「私もそう思っていました」、「税金は、排除対策ではなく、もっと有効な対策に使うべき」等のコメントが寄せられるかと思ったら、実際は真逆で、「ホームレスになるのは自己責任」、「臭い人がベンチを占拠するのは迷惑」、「ホームレスの臭いを嗅いでから記事を書け」等、いわゆる“2ちゃんねる”的な数百のコメントで、祭り状態になってしまったのです！

今は、残念ながらネットでもリアルでも、自己責任論やヘイトスピーチの嵐ですが、2006年当時、私が初めてネットに掲載した記事で、このような攻撃にあい、びっくりしてしまいました。  
むしろ世の大多数の人々は、ホームレス排除のベンチに賛成なのか？  
景気が悪く、いつ、誰がホームレスになっても、おかしくない世の中なのに……。

私がオーマイニュースに投稿した記事は、炎上によって思わぬ形で注目を集め、ついには **TBS** のニュース23ディレクターの目にとまり、取材されることになりました。市民による情報発信の可能性、といったような特集テーマとして。

それにより、私は初めて「撮られる」ことを体験しました。最終的に放送されたのは3分程度でしたが、実際には10時間以上密着取材をされました。大きなテレビカメラで撮影される日もあれば、ディレクターが家庭用のハンディカメラで撮影する日もあり、(こんな小さなカメラで撮った映像でも、テレビで放送できるのか?)と驚きました。



テレビで放映された時、私が公園で野宿者取材の様子を見て、映像で伝える表現に圧倒されました。私はそれまで、文章と写真によって何かを伝えたいと努力してきましたが、それをはるかに超える情報が、画面から溢れるように伝わってくるのです。ホームレスの人の表情、声、佇まい、さらには「爪」といった小さなパーツまでが、発言内容以上にその人の置かれている状況を物語っている。すっかり映像の世界に魅了されてしまいました。

ニュース23のディレクターが持っていた小さなハンディカメラ。あんなビデオカメラだったら、自分でも買って、映像が撮れるかも知れない……。そう考えて、2007年のお正月に、ヨドバシカメラで5万円の家庭用小型ビデオカメラを買いました。こうして、私の映像制作が始まったのです！

当時、ジャーナリズムを学びたいと、会社を辞めて留学することが決まっていたので、買ったばかりのビデオカメラを持ってイギリスに行きました。シェアハウスの中で、街なかで、ビデオダイアリーのように日々の生活を記録し、YouTubeにアップしました。

撮影と編集をひたすら繰り返し、3分程度の短い動画をアップ。これを80回（80本）ぐらい繰り返すことで、映像制作の基本的なノウハウを学びました。…とはいえ、映画学校に通ったことがないので、ずいぶん自己流ですが（汗）。

留学を終え、日本に帰国してからもドキュメンタリー制作を続け、今日まで試行錯誤しながら映画を作り続けています。そして現在は、「りべるたん」を撮影……。一体どんな映画が出来るのでしょうか！？

次号以降では、いよいよ「りべるたん」の映画作りについて書いていけたらと思います。今後ともどうぞよろしくお願いします！

※オーマイニュース日本版は、現在は廃刊。オーマイニュースに投稿した私の記事は、以下のブログより読めます。ご興味のある方は、読んでみてください♪

「公園のベンチが人を排除する？ 不便に進化するホームレス排除の仕掛け」

<http://brianandco.cocolog-nifty.com/blog/2009/08/post-4ddf.html>

(「ホームレス撃退ベンチ 早川由美子」などの検索ワードで検索可能)

パイプの煙が立ちのぼった。目の前にいるのは丸めがねの青年。黒い座卓に向かいあったその青年は、煙草をほぐし、朱赤に黒のパイプに葉っぱを詰め、ゆっくりと煙をくゆらせはじめた。

「代表の泉野です」

泉野の煙になずなは眩惑された。

彼は、書棚を背にして座っており、そこには乱雑に古ぼけた文学書や、哲学書、マンガ、文庫本などが並んでいた。棚の上には、崩れ落ちそうに、積み重なった白ヘル黒ヘル青ヘル赤ヘル。『貧乏』『反戦』『鍋』『全共斗』などと大書きされたヘルメットの山。

「学生運動されているんですか？」

「そうです」

落ち着き払った泉野は、丁寧かつ威厳ある態度を取り続けていた。なんだか先輩を前にしている新入生のようなとなずなは錯覚におちいった。

春、木の芽時。なずなは水ぼうそうにかかり、冬から春への長い季節を寝込んで過ごしていた。受験j期が終わり、卒業式の日にも高熱で布団の中にいた。子どものかかる流行やまいが治ったころには、青い春のざわめいた時間はひとあし先に進んでいた。

どうにか高校を卒業したなずなは、発病の前に一校だけ合格していた、郊外にある東京桂椎大学に入学し、新設された校舎に通うことになった。住宅地と農地が混在してある土地にできた無機質な校舎に、いつしかなずなは通えなくなった。教室の窓は、校門正門に面していて、講義に遅刻しようものなら、窓際に並んだ学生たちから、その姿は丸見えなのであった。講義時間には、一年生しか存在しない校舎はがらんと静まりかえり、少しの異端もはじかれる空気が漂っていた。やがてなずなは大学へ通わなくなり、電車の下りと上りの向きを変え、新宿や池袋に向かうことが多くなった。映画館、公園、喫茶店。ただ

街をフラフラしていた。街をあてどもなく歩いているうちに、住宅が立ち並ぶ一角に迷い込むことがあった。

家、家、家。家の扉。扉の向こうには扉の数だけの世界があるのだろうか。

東池袋にある、一軒家の扉をはじめてなずなが開けたのは、夜だった。内側から外への扉を開けば、外には無限の可能性を秘めた「世界が広がっている。そしてその世界には無数の扉がある。扉から扉へと続くその世界は、入り組んだ迷路として、存在しているのかもしれない。右も左も蓬はわかっているつもりで、生きていくふりをしていたが、なんにもわかっちゃいなかったことが、一夜にしてわかった。

蓬を待ち構えるように、翌日、部屋にいた泉野龍は、上智大学の一年生だった。そもそもなずなは、一枚の選挙ビラがきっかけで、ここ、東池袋の赤い家を訪れたのだった。統一地方選挙豊島区議会議員立候補者、南部哲太。`無所属、新人、27歳`をうたった彼のビラは、偶然、訪れた湯島にある根占工房という写真家の工房に置かれていた。小路に立っていた「工房展」の木の看板にひかれ、ふらりとはいった古民家で行われていた写真展だった。写真展や美術展のチラシに混ざっての、異色の選挙ビラには「もう黙ってられない!」`更に`貧乏な若者でも暮らせるシェアハウス運動を運営中` `「バーおうち」にてコミュニティ創生活動を展開中`の文字。

湯島の小路から、『バーおうち』へと新しい扉を開けた2015年の春だった。

『バーおうち』のカウンターの中には、小瓶のビールをラップ飲みしていた南部哲太がいた。

そして選挙ビラの束が山になって置かれた部屋。

頭の中を小さな疑問符があふれるように浮かぶと、そのはてなが、問いのかたちにならないものである。

壁一面に張られたビラ。落書きだらけの三角形の椅子。扉に張られた注意書き。`一泊につき700円カンパお願いします。`と記された空き缶。

雑然とした部屋は、ふしぎと居心地が良かった。

昨夜は、8人ほどの人間がたむろしていたが、泉野とふたりだけの室内の昼間。

「泉野さんは、シェアハウスの代表なんですか？」

「いえ、りべるたんの代表です」

『バーおうち』にて、「りべるたんに来ませんか」と、カウンターに隣り合った南部と親しげにしていた青年、淀橋寛治に声をかけられ、夜道を歩いた。酔っ払っていたのでなにを話したのか覚えていない。

泉野は一冊の本を、書棚から取り出し、座卓の上に置いた。

「資本論？」

「読書会を、しようと思ってます」

マルクスの名前は知っていたが、口にする人間にははじめて会った。天井近くに貼られた白黒写真のポスターの中の、ひげもじゃの西洋人が、カール・マルクスだとその日知った。

ほどなくして、北本なずなは、ころがりこむように、この赤い家に住み着くことになった。靴だらけの玄関に入ってすぐの壁には、黒のビニールテープで形どられた、`Libertine`の9文字のアルファベット。

一階の東に向けて開け放たれた窓から、風が抜けていった。

※

この物語は、事実を基にしたフィクションです。